

デジモンテイマーズ

第2話

君はぼくのもだち
テリアモン登場！

第3稿

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

2000／12／06

登場人物

松田 啓人「タカト」(10)

李 健良「リーくん／ジェンリヤ」(10)

牧野 留姫「ルキ」(10)

ギルモン

テリアモン

レナモン

クルモン

淀橋小学校

浅沼奈美(26)……………担任教諭

塩田 博和(10)

加藤 樹莉(10)

北川 健太(10)

黒沢 清二(25)……………校長

岩本 哲也(25)……………男性教諭

森 聡明(25)……………ジャージの男性教諭

生徒たち

給食室のおばさんたち

両親達

松田 剛弘(41)……………タカトの父親

松田 美枝(35)……………タカトの母親

ネット管理局の男(32)

同／女(26)

中央公園のアベック／男(27)

同／女(23)

レナモンの敵デジモン「成長期／アーマー体」

同／「完成体／究極体」

前回リプライズ/前回のシーン・ダイジェスト

N 「デジモンの大好きな小学生タカトは、不思議な出来事に
出会い、自分が考えたデジモン、ギルモンをこのリアル
・ワールドに誕生させた」

空き地

タカト「ギルモン！」

ギルモン「ぐわっ！」

いきなりギルモン、巨大に口を開け——、塀の上に
向かって光弾を放った！

バキ！ どおおんん！ フギャー——ッ！

ギルモン、タカトの方に再び向いて、つぶらな瞳で
見つめている。

タカト「——ぎ、ギルモン……」

ギルモン、口をやや開ける。

タカト「(ギョツツツツ)あうっ」

タカト、自分にも光弾を撃たれるのかと狼狽した後
退る。と、ギルモン、巨大な爪の脚を繰り出し、タ
カトに向かって近づいてくる。

タカト「ぼっ、ぼっ、ぼくはデジモンじゃないんだぞっ！」

ギルモン「(ニコツ)もーん」

ギルモン、タカトの眼前に鼻を突き出し——、ちょ
ん、とタカトの鼻を小突く。

タカト「わっ」

タカト、尻餅をつく。

ギルモン、小首を傾げてタカトを見つめている。

ギルモン「もん？」

タカト「(呆然)——、ふっ、うふふっ！」

笑い出すタカト。

タカト「ぼくが判るんだね！ そりゃそうだよ！ だって、ぼ

くが君を考えたんだもの。ねっ、ギルモン！」

ギルモン「ぎる……?」

空き地で、しばらく笑っているタカト――。

サブタイトル

タカトの家前

日が暮れ、すっかり暗くなっている坂道の商店街。
もうマツダ・ペーカリーの営業は終わっている。

タカトの声「(オフ)ただいまー」

同/居間

ニュースが流れるテレビ。

ア ナ「(殆どオフ扱い)――次のニュースです。今日の日中、
またネットワーク障害が散発的に発生し、大きな被害は
出ませんでした。各方面に影響を及ぼしました。政府の
ネットワーク管理局では――」

母親は台所で夕飯の用意をしており、父親は爪を切
っている。

父 「お帰り。遅かったな」

母 「もうすぐご飯だからね」

タカト「あっ、うん(汗)」

タカト、冷や汗をダラダラ流しながら、父親の死角
を突いて、二階へ。その後を、大きな段ボール箱が
――ドン。階段の手すりにぶつかる。

父 「ん……？」

タカト「(くわっ)」

父が振り向くと――

タカト、段ボールを抱えているフリ。

父 「――タカト」

タカト「なっ、何っ」

父 「何だい、それ」

タカト「えっ？ それって、な、何の事かかっていうかぼくそん
な、あああええっと」

父 「――」

母 「また変なゴミ拾ってきちゃダメよもつ。どうせ捨てちゃうのに」

タカト「あ、うん、判った」

タカト、段ボールを持ち上げる、フリをして上がる
うとするが、重すぎ。

タカト「（小声）ギルモンっ。登るのっ」

ギルモン「（オフ）のぼもーん」

タカト「しっっ」

いきなり凄い速さで階段を自分で駆け上がる段ボール。タカト、ぶら下がりながら――
どどどどどどど

父 「（再度振り向き）ん……？」

タカトの部屋

タカト「ふう……」

段ボールから出ているギルモン、タカトの机にある
ものを爪でバタバタとひっくり返す。

タカト「あつ、こらっ。ダメだよギルモン」

ギルモン「ダメもん？」

タカト「いい？ ギルモン。みんな、君みたいな大きなデジモン
をいきなり見たらびっくりしちゃう。ぼくは、せっかく
君と出会ったんだもの。ずっと一緒にいたいじゃない。
だからおとなしくして欲しいんだ。わかる？ギルモン」
ギルモン、暫くタカトを見つめていたが――

ギルモン「（自分を指し）ギルモン？」

タカト「（頷き）――ぼくは（と自分を指し）タカト」

ギルモン「タカ、トオ――」

タカト「（ニコッ）」

ギルモン「モン？」

タカト「（むっ）タカトモンじゃない。たーかーと！」

ギルモン「タカトモン」

タカト「ぼくはデジモンじゃない！ ぼくは――、ぼくはえつと

——、そうだ！ 君のパートナーなんだよ！」

タカト、押し入れを開け、ゴソゴソ何かを探す。

ギルモン「タカト、モン？」

タカト「違っつてば！ ぼくはタカト！」

タカト振り向くと——、額にゴーグルをつけている。

タカト「ぼくは君の、デジモンタイマーなんだ！」

ギルモン「——」

ヒュプノス（ネット管理局監視システム）画面

飛び交う輝きは情報の奔流。

精密機器のプリントパターンのような世界（多層的）。

整然とした軌跡は秩序立った図形を描く。

と、それらの秩序を全く無視した、ランダムな有機

的軌跡をとる、大きな緑色のグリッド。

女の声（管制局員）「ワイルドワン、補足しました。周囲のデー

タを取り込みながら拡大中です」

男の声（同）「トレーサーを撃て」

バシュ！

緑のワイルドワンに向かって、凄まじい勢いで接近

していくギガ・ビット・トレーサー。

女の声「トレーサーのヴァーチャル・ヴィジョンです」

画面、切り替わり、トレーサーのPOVに。

幾層もの情報経路レイヤーを突破し——、緑のフレ

イムに包まれた存在に接近。

それは——

男の声「こいつ！ リアライズしようとしている！」

巨大な口蓋を開いた××モン、閃光を口から放つ！

ビシッ。

ブラックアウトする画面。

タカトの部屋 / 深夜

そつとドアが開き、暗い室内に廊下の光が差し込む。

中を覗く父親。

ベッド脇に段ボール（中は見えない）。

その中に片手を入れて、優しい寝顔のタカト。

父 「（鼻をくくんくとさせ）……ふうむ……」

微笑し——、そっとドアを閉める。

段ボールの中では、身を丸めて眠るギルモン——。

居間

風呂から上がった母親、顔にクリームを塗っていた。
降りてきた父親、ぼつつ、とそれを見ている。

母 「——なに」

父 「あ、いや、うん」

母 「（慚然）」

父 「なあ……」

母 「なに」

父 「うん、いやな、タカトって一人っ子だろ。でまあ、例え

ばだ。ほら、ええと——」

母 「駄目」

父 「——未だ何も言っていないぞ」

母 「駄目ったら絶対駄目」

父 「——どうしても？」

母 「ウチの商売考えなさいよ。それにね、あたし犬とか猫、

大っきらいなの子どもの時から！」

父 「——うん」

母 「（頭のタオルをとり）明日、ちゃんと言い聞かせてくだ

さいよ。ウチはペット飼えないんだって」

父 「——うん……」

中央公園／深夜

若い恋人同士が、くすくすと笑い合いながら、駅の
方に向かって歩いている。

と、柵で閉鎖されている噴水（じゃぶじゃぶ池）の

向こうに、青い靄が立ち昇っているのに気づく。

女 「ね、あれ、何……？」

男 「——さあ……、誰かあそこで焚き火してんじゃないの？」

女 「そっか」

時おり、靄の中で激しい閃光が走るが、気にせず男は去っていく。

しかし——、カメラはそのまま柵を越えて——靄、否、デジタル・フィールドの中へ。

デジタル・フィールド内

さつきトレーサーを撃破し、そのまま実体化（リアライズ）したデジモン、己の生存を賭け全力で戦う。敵デジモン「ここで貴様如き長期のデジモンに負ける訳にはいかないのだ！ やっとこの世界へ出て来れたのだ！」

その相手とは——

留 姫「レナモン！」

敵の攻撃を、俊敏にかわし、高く跳躍するレナモン。

6

じゃぶじゃぶ池／遠景

若い男女のかなり後方。

デジタルフィールドから突出し、虚空に躍り出るレナモン。

口づけている二人は気づかない。

クルモンの声「んーん、何してるですかーくる？」

ギョツとなって見回す二人。

クルモンが、横断橋の手すりの上に乗って二人を見ていた。

男 「な、なんだこいつ」

女 「あはっ、かわいいー、これオモチャ？ オモチャだよね？」

クルモン「ねー、今二人で何してたですかーくる？ クルモン、

知らない事、知りたいですー」

男 「お前、ずっと見てたんか」

クルモン「はい」

女「——おもちゃ、じゃない、コレ」

男女、顔を見合せ——、逃げ出す。

クルモン「あーん、どうして行ってしまっただすかーくるー」

その遠方、デジタル・フィールドに激しい光。

レナモンのPOV

敵デジモンのスキャン画像。

留 姫「(オフ) ×××モン、×××型完成体！ 「特徴解説」

デジタル・フィールド内

レナモン「留姫！ ブースターを！」

留 姫「判ってるわよ！」

サツ、カードの束を片手で扇に広げ——、その一枚を親指で押し出す。

留 姫「(カード名称/抽象的なもの)、カード・スラッシュ！」 7

留 姫、そのカードをD・ARKにスロットイン。

D・ARKから眩い光の奔流。それはレナモンを包んだ。

レナモン「レナモン、ブースト！ (仮称)」

変身していくレナモン。

しかし！ その前に、敵デジモンが究極体への進化を始めていた。

レナモン「！」

敵デジモン「×××モン、究極進化ああああっ！」

留 姫「うそ！ 何でこんなタイミングで！」

ぐおおおおおっ！

強烈な姿へ進化していく敵デジモン。

留 姫「(愕然) 何故、出来る筈なのに！」

タカトの部屋

ベッドの上は空。

タカト、段ボールの中で、ギルモンと一緒に身を丸めて眠っている――。

健やかな寝顔――、であったのだが、ぴくり、と身を一瞬ぴくりと動かし、眉を顰める。

タカト「……ん……」

デジタル・フィールド

レナモン「負けない！ 留姫、見ていて！」

留 姫「（ハッ）――そうよ！ レナモン！」

レナモン「〔必殺技名〕ーッニ」

敵デジモン「させるかあああッ！ 〔必殺技名〕ッ！」

二つのパワー、激突！

ドオオオオオン！

二つのパワーはぶつかった衝撃。

しかし、動じていない留姫。既に、いつものポーカー・フェイスに戻っている。

留 姫「――いくら究極体となっても、こちらのパラメータの方が上。負ける筈がない」

ずーん……。崩れる敵デジモン。倒れ込むと同時に量子化ノイズに転換していく。

ノイズは漂いながら、レナモンが吸収していく。

ビクン……。

戦った相手の データ が、自己へ取り込まれていく感覚が、レナモンを硬直させている。

留 姫「強くなるの、レナモン……」

消えゆくデジタル・フィールド。そこは、本来の姿、寂しい工事中の公園に戻っていく――。

西新宿／商店街／翌朝

朝の光景。

タカトの家／居間

だだだだつと階段を降りてきたタカト、ランドセルを放り、テーブルの前に飛びついて、皿に盛られたデニッシュをくわえ、いくつかはポケット、服のあちこちにねじ込む。

母 「(オフ)タカトー」

タカト 「(もぐもぐ)なにー」

店から顔を覗かせる母親。

母 「あのね、前にもタカト、猫を拾ってきた事あったでしょ」
タカト 「拾ったんじゃないよ。公園でおばあさんがくれたんだ」

母 「だから……。ウチは食べ物を買おうお店だし、駄目なのよ
ペットは」

タカト 「……」

母 「今度は何連れてきたか知らないけど、返してらっしゃい」
タカト 「——(作り笑い)何の事かなあ。じゃ、行ってきまーす」

タカト、ランドセルをひつ掴んで出ていく。

母 「ん？ まだそんな時間じゃ……」

店前

飛び出してきたタカト、上を見上げる。

タカト 「ギルモン！」

ギルモン 「タカトー！」

二階の窓からびょん、と飛び下りるギルモン。

タカト、辺りを見回し、ギルモンに段ボールをかぶせる。

ギルモン 「ふぎゃ」

空き地

ギルモンが現れた、空き地。

タカト、板を囲んで、ギルモンが隠れられるだけのひみつ基地を即席で作り上げた。

タカト「よし出来た！（ギルモンと見比べ）れ……、ちよつと、小さい、よね……。我慢してね、ギルモン。僕は夕方まで学校に行つてなくちゃいけないんだ」

ギルモン「がっこう？」

タカト「だから僕、ずっと君と一緒ににはいられないんだ。いい？僕がまたここに帰ってくるまで、ここでおとなしくしてるんだよ。帰つたら、あそぼ！」

タカト、ポケットからよくぞそんなという数のパンを出して、紙に包む。

タカト「お腹がすいたら、これ食べてね。（タカト、一つをがぶつとかじつて見せる）モグモグ。誰か他の人が来たら、隠れるんだ。見つかる大変だから。あつ、そうだ。

（睨んで）また猫に、×××なんて吐くんじゃないぞ！猫はデジモンじゃないんだからね！」

ギルモン「あそぼ……」

タカト、ランドセルを背負い

タカト「帰つたらね！」

手を振りながら走りだすタカト。

ふとギルモン、傍らの、パンが包まれた紙を見て山盛りのパンを一口で一気に平らげる。

タカト「（遠くから振り向いて）あーっ！もう食べちゃった。しょうがないな！おとなしくしてんだよーっ！」

路地を曲がっていくタカト。

ギルモン、もぐもぐとパンを食べると――、おかしそくに笑い出す。

ギルモン「あはははっ！あそぼ！」

学校裏手公園（中央公園ではない）

広げられたシートの上で、カードが手早く交錯。

ケンタ「デジモン進化ーッ！××モン！」

ヒロカズ「こっちはジヨグレス進化だ！××モン！」

カードをめくる二人。

ケンタ「たはっ……」

ヒロカズ「(ニヤ)勝たせていただきました、っと。あれ？タ

カトの奴、来ないなあ」

タカト「おい！」

ケンタ「遅いじゃん」

タカト「御免。ちよっと色々あって」

ヒロカズ「あれ、何だよ、ゴースルなんかしちゃって」

ケンタ「ホントだー」

タカト「ふふっ。いいじゃない。僕、デジモンタイマーになるん

だから」

ヒロカズ「はあ？ まあいいけど。じゃ行こうぜ。一時間目、体

育だし」

ケンタ「(がつくり)マジかよー、朝っぱらから走らせんなよな」

タカト「じゃ、これ僕しまっとく」

タカト、シートやカードを菓子缶に入れて――

時計台の裏側の隙間に隠そうとして――、

タカト「あ」

フラッシュノ前話

ブルーカードを見つけた場面

公園ノ時計台裏

缶をもう一度出して、中を見探すタカト。

タカト「――あれ？ 無くなってる、あの青いカード……」

ヒロカズ「(オフ)タカト、何してんだよ、遅れるってば」

タカト「あ、うん今行く」

タカト、納得出来ないまま缶を仕舞い、駆けていく。

始業のチャイムが鳴り始めた。

と――、時計台の脇に、ミシリと草を踏む、鋭い爪
の脚――。

淀橋小学校ノ校庭

ジャージ姿の担任教諭・奈美、ピツと笛を吹く。
ダツ、と駆け出すタカト。

タカト「ふんっ！」

ジャンプ！

砂場に着地。走り幅跳び。

体育委員の子ども、メジャーで計る。

体育委員「メートル×センチ」

タカト「やった！ 5センチ伸びた！」

ヒロカズ「でも俺の方が40センチ上だ」

タカト「（むっ）だってヒロカズの方が背が高いし」

校庭の反対側、木々の下を歩いていく、段ボール。

タカトたち、気づかない。

奈美「じゃあ次は女子ね。5人づつ並んで」

学校内／廊下

授業中で、静まっている校内。

ガラン、とした廊下。

そこを、ペタペタという足音をさせながら、段ボールが歩いてきた。

くんくん。鼻を鳴らしている音。

ギルモン「（小声）タカト……？」

と！ 突如一つの教室から男性教諭の怒鳴り声。

教師「（オフ）こらヤマザキッ！」

びくん、と立ち止まる段ボール。

教室内

教師が教壇で仁王立ち。

教師「宿題忘れましたとは何という言いぐさだ！ 忘れてたで済

んだら警察いらねーんだよ！」

どん！

ドアから衝撃音。

教師「……」
ギョツとなり、ドアの方を一斉に見る生徒達と教師。

生徒たち「……」
ドアの窓から、大きな目玉が中を覗き込んでいた。

ずるずる、爪を引きずる音がして、目が窓から遠ざかる。

廊下

そつと戸を開き、廊下を覗き込む教師。

教師「……（汗）」

段ボールがヨタヨタと歩き去っていく後ろ姿。

ふとドアを見る教師。

ドアには爪痕が。

教室

ぴしり。後ろ手に閉める教師。

今起こった事態をどう受け止めていいのか必死に悩んでいる。

生徒1「せんせー、何だったんですかー？」

教師「……、気にすんな。今は授業の時間だ。そうさそうなんだ。余計な事に気を散らしてはいけないそうそう」

ぶつぶつ。

廊下

歩いていく段ボール。

窓外では、体育をしているタカトたちが遠くに見える。

段ボール、そのまま進行。

と、階段を降りてきた校長らしき、壮年の教師。

校長「——ああ、ごくろうさん」

段ボール、立ち止まる。

校長、構わず行こうとして、振り向く。

校長「……」

段ボールの足元を見ると――、鋭い爪。

校長「（咳払い）えへんえへん。あー、君」

段ボール「……」

校長「何組の生徒かね？」

段ボール「……セイト？」

校長「君の名前は」

段ボール「ギルモン。オマエは？」

校長「ヤスヒサ、って私は校長だ。校長先生と呼びなさい」

段ボール「コウチヨウセンセイ、アソボ」

校長「（嘆息）遊ぶって君、高学年にもなって授業中に一人で何をしているんだね。その変な段ボール、とりなさい」

段ボール「……」

校長「とりなさい」

段ボール「だめ」

校長「なぜ」

段ボール「タカトがダメって言ったから」

校長「タカト？ 誰か判らないが、この学校の中では、校長先生の言う事を聞きなさい。いいね」

段ボール「うん判った」

ぼん、と段ボールをぶち破るギルモン。

校長「……」

ギルモン「じゃああそぼ、こうちようせんせい」

校長、黙ってギルモンの顔に触る。

ギルモン「あははははは」

鼻息を吹き掛けるギルモン。

校長「……」

険しい顔で後ずさり――、コケる校長。

校長「だっ、誰か……」

よろめきながら――、壁に手を伝い――

ギルモン「（小首を傾げ）遊ばないの？」

校長「こんなおかしな事……」

と、指に警報機が触れた。

とつさに、アクリル板を押し込んで、ボタンを押す。
鳴り響く警報。

校庭

ジリリリリリリリ!

ギョツとなって校舎を見る奈美。

ヒロカズ「ん? 火事か?」

ケンタ「うそーっ」

タカト「! (嫌な予感)」

立ち上がるタカト、校舎の方を必死に見回す。

タカト「——」

1階の廊下(渡り廊下?)を、段ボールが過つていくのが見えた!

タカト「ぎっ、ギルモン、なんで学校なんか……」

と、横から心配そうに

樹 莉「タカト君、どうしたの?」

タカト「えっ? あう、ぼく——」

タカト、うとうとなつて、校舎に向かって走り出す。

樹 莉「あっ、タカト君!」

廊下

生徒達、廊下に出てざわざわしている。

その向こうで声を張り上げている校長。

校 長「だーかーらっ! 私は見たんですよ! 私はそれと会話

すらしたんですから!」

前に立って困惑しているジャージ姿の男性教師。

教 師「しかし、何なんですか? 恐竜みたいな格好して、子ども

もみたいに喋るって……」

生徒たち、面白がっているだけ。

女子1「(クスクス)校長先生、お酒飲んで学校来てるんじゃないのー?」

女子2「どうでもいいけど、もう休み時間にしてくんないかなー」
男子1「(別のグループ) そんな学校の怪談にもなんねえよな」
男子2「だって、学校の廊下に怪獣とかなんて——」

喋っている生徒達の脚——。

その中を、ずんぐりとした、ぬいぐるみサイズのデジモンがひよこひよここと抜けていこうとしている。

ぎゅっ。その耳を軽く掴む少年の手。

テリアモン「むぎゅ」

リ——(手を離し、小声で)こら。出てきたら駄目だ」

テリアモン「もーまみたいー」

子ども達の雑踏の中へ、息を切らし駆け込んでくるタカト。

タカト「——」

周りの生徒の声が聞こえた。

女子1「(オフ) 怪獣見たからって、フツー警報機鳴らす？」

女子2「(オフ) マジ見たんなら、押す」

女子1「(オフ) 押すーっ？」

タカト「——(呟く) 怪獣……」

ダッ。駆け出すタカト。

校舎の裏

必死に見回しながら走るタカト。

タカト「ギルモン！ ギルモン！」

いない。途方にくれた顔。

女性の声「(遠いオフ) ヤダーッ！ なんてーッ！」

ハッと、振り向くタカト。

給食室

そつとドアを開けるタカト。

調理機から湯気が立ち昇っている部屋。

見回すが——、ギルモンの姿はない。

タカト「——？」

給食調理の職員たちが、散乱したパン・ケースの山を前に困惑している。

職員1「パンだけ、無くなっちゃってるんですよ」

タカト「二——ギルモンだ……」

職員2「（オフ）だって、全校生徒分のパンなんですよ？」

職員3「（オフ）早く手配して、給食時間に新しいパンを！」

タカト「（激しい動揺）どうしよう……。ギルモンが……」

二階廊下

自分の教室に戻ろうとしているタカト。

タカト「ギルモン……。何で学校なんか……」

と、前に立っている少年に気づく。

タカト「——」

リー「今、ギルモン、って言ったね」

タカト「え……」

リー「あれは、デジモンだ。そうでしょ」

タカト「——（驚愕）な、なんで君——」

と、リーの背後からぬつ、と小さなデジモンが顔を覗かせる。

タカト「！」

テリアモン「このヒトがタイマー？」

タカト「て、テリアモン……。喋ってる……」

テリアモン「——自分のパートナーデジモンとちゃんと付き合え

ないんじゃない、デジモンタイマー失格だなー」

リー「（テリアモンを睨み、静かに叱責）テリアモン」

テリアモン「もーまみたいー（サツと隠れる）」

タカト「（悲しくなる。唇を噛んで）——ぼく——」

ダッ、駆け出すタカト。

リー、じっと見つめる。

廊下

メイズの様な、暗い廊下。涙で滲んでよく見えない。

フラッシュ

天空から、暗い路地に差し込むデジタル・フィードの光の筋。それを追って、タカトは走っていた。

廊下

ハツとなって立ち止まり、上を見上げるタカト。

屋上

息を切らし、屋上に向かってくるタカト。
ポツン、とギルモンがそこにいて、空を見上げていた。まるで元に居た世界を懐かしんでいる様に。

タカト「ギルモン……」

ギルモン、嬉しそうな顔をしてタカトを見る。

ギルモン「タカトーっ」

タカト、ギルモンに飛びつく。

タカト「駄目じゃないか！ ぼくが言った通りにしてくんなくちゃ」

ギルモン「タカト、どうしたの？」

タカト、グズグズと鼻を鳴らす。

ギルモン「タカトの顔、濡れてるよ」

タカト「うるさいなー」

泣きながら、タカト、笑っている。

タカト「しょうがないや。放課後までここで隠れてるんだよ」

ギルモン「そしたら、あそぼ」

タカト「うん」

新宿副都心

夕方の黄金色の時――。

中央公園／裏道

土手下の狭い道を歩くタカトとギルモン。

タカト「——どっかいいところ、無いかなあ」

ギルモン「何？ タカト」

タカト「ん？ だから、ギルモンが一人でいても見つからないと

ころ。こちら辺は、あんまり人が来ないんだ」

ギルモン「ふーん」

ヒーン。

何か鋭い音が耳を掠めた。

タカト「あれ？」

振り向きざま、ギルモンに命中する光の矢。

ドオオオン！

ギルモン「わあっ」

ギルモン、吹き飛ばされ、金網を凄まじく凹ませる。

タカト「ギルモン！」

続けざまに光の矢がギルモンに放たれる。

ドドン！ ドドン！

タカト「ギルモン！」

キッと、見上げるタカト。

留姫の声「（抑揚無く）レナモンは闘いたがっている」

タカト「誰だよ！」

ぬっ、と木立の陰に立つ、瘦身のデジモン。

そして、小柄な少女。

留 姫「どきなさいテイマー。デジモン・バトルだよ」

タカト「ええっ」

以下次回